

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 7 月 12 日現在

機関番号：32662

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370113

研究課題名(和文)クラシック音楽の演奏様式と電気テクノロジーの連関についての総合的研究

研究課題名(英文)The connection between the performance of classical music and modern technology

研究代表者

沼野 雄司 (NUMANO, YUJI)

桐朋学園大学・音楽学部・教授

研究者番号：00322470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が目標としていたのは、レコードに代表される録音メディアの登場による演奏様式の変化について考察すること、そしてマイクロフォンに代表される録音機器の発達と演奏様式の関連について考察することであった。3年間の研究期間を通じて、最初期のレコード録音が様々な意味で「明確」な演奏様式の確立に貢献していたこと、他の演奏とは「全く異なる」様式の確立を加速したこと、さらには録音機器の発達によって演奏様式の微細な差異が可聴化され「演奏聴取の専門家」の登場を促したことなどが明らかになった。科研費による研究期間は既に終了しているが、今後も継続的に調査を進める予定である。

研究成果の概要(英文)：This research has treated the style of classical music performance in relation to the appearance of the 20th-century recording technology. As a result, we examined following 3 points. (1) Early recordings of classical music prompted "Clear and distinct" performance style. (2) Early recording technology also prompted quite different performance style from other musician. (3) Recording technology made minute difference clear, and gave way to the emergence of the critics mainly evaluate "performance style".

研究分野：音楽学

キーワード：録音 演奏様式

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、1877年のエジソンによる蓄音機特許取得、そして同年のカーボン型マイクロフォン特許取得を発端とする録音・拡声テクノロジーによって、クラシック音楽の演奏様式が変化したことを検証することを主な目的としている。

電気テクノロジーと音楽の関係は、ポピュラー音楽研究の中では既に重要かつ中心的な課題として採り上げられてきたものの、クラシック音楽に関しては、依然として「生演奏」というイデオロギー（前提）が強く作用しているために、テクノロジーとの関係は無視ないしは隠蔽されてきたといえる。本研究は主に1900～1930年代におけるクラシック音楽の演奏を対象にして、大きく2つの点について調査・研究を行ったものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は大きく二つある。まず第一に、20世紀初頭におけるレコードによって代表される録音メディアの出現によって、クラシック音楽の演奏様式に変化が生じたのか、生じたとすれば、それはどのようなものかを明らかにすること。

第二に、マイクロフォンをはじめとする録音機器の発展は、演奏様式にどのように作用したのか、作用したとすれば、それはどのようなものかを明らかにすること。

## 3. 研究の方法

初年度に徹底したのは、文献の収集と

読み込みである。

これらの文献研究においては、もっとも基本的な文献として John Butt, *Playing with History: The Historical Approach to Musical Performance*, Cambridge U.P.(2002)を参照しながら、ピリオド・アプローチを主軸に据えた20世紀演奏史の概観を行なう一方で、1920年前後から顕著になる弦楽器のヴィヴラートを、当時の未熟な録音機材との関係によって読み解いた Mark Katz “Aesthetics out of exigency: violin vibrato and the phonograph” *Music and Technology in the Twentieth Century*, The Johns Hopkins University Press(2000)を出発点に置くことにした。

Katzは初期のアコースティック録音(電気録音以前はラッパ型のホーンに向けて音を発した)の特性を勘案した上で、かつては限定的な技術であったヴィヴラートがいかにこの録音において必要であったのかを、録音資料を基にして説得的に論じたものである。Katzによれば、ヴァイオリンのヴィヴラートは、初期の貧弱な機材においては音が十分に「通らない」ために、こうした技術によって奏者の音を立ち上げる必要があったのだと述べているが、この視点は本研究に直接的な示唆を与えるものであった。

また、初期録音を考える上で重要なトポスの問題(スタジオやライブ録音の会場など)については Donald Greig “Performing for the microphone” *The Cambridge Companion to Recorded Music*, Cambridge(2009)を参照しながら、舞台におけるパフォーマンスと「スタジオの中での録音」との様々な差異について考

察を加えた。とりわけアメリカのスタジオの状況を検討する際には、いくつかの点で注意が必要になったことが明らかになった。これら以外にも様々な文献を収集、精査したが、それらの中にはレコード録音と演奏者の関係について論じた Erik Davis “The Esoteric Origins of the Phonograph” (2004)、飛行機を初めとする外在的なテクノロジーが音楽の演奏と創作に与えた影響について触れた Hans-Joachim Braun “Movin’ on” (2000) などがあり、これらはいずれも間接的な出発点となった。

さらに初年度には1900年から1930年代（すなわちアコースティック録音から電気録音への過渡期にして、第二次大戦後までの時期ということになる）の録音音源に関して、大阪音楽大学、東京音楽大学、そして本学などの国内施設をめぐり、SPレコード等の資料を参照するとともに、アメリカのワシントンDCにある議会図書館を一週間にわたって訪問し、とりわけピアノ音楽の初期録音に関して網羅的な調査を行なった。また、国内の音楽研究者よりショパンの「ワルツ嬰八短調」(作品64-2)の200種におよぶ録音を提供してもらおうという望外の事態が生じた。これは1905年のミハウォフスキ、ドホナーニ、1906年のパデレフスキ、1907年のパハマンといったピアニストに始まる膨大なコレクションであり、これをひとつのデータベースとして、統計調査の分析方法についての検討を様々な角度から行なった。

次年度には、引き続き文献収集、および国内における様々な資料館などの調査、研究者との対話を行いながら、収集した録音素材について、その録音状況（ノイズなどの程度）、テンポ変化（アゴーギク）、ダンパー・ペダルの持続、装飾音の入れ方、強弱法などの観点から詳細な分析と整理を行なった。これらの作業の中で、1910年代の

演奏様式と1930年代の様式の断絶および、それに録音メディアが深く関与していることが、様々な点からうかがえたが、ピアニストとしては、とりわけリスレールやホフマンの録音の重要性を認識するにいたった。

さらにこの過程において、アメリカ議会図書館ほかのインターネット音源資料を補助的な資料として導入し、規模を広げて調査と考察を行うに至ったが、その結果として電気録音の登場とともに演奏の差異が一気に明確化し、さらには他の演奏スタイルを意識しながら、あえて異なった演奏を行った可能性が浮上した。また、理由はともかくとしても、実際に演奏様式が細分化する様子の子細に観察することができた。

最終年度には、一次資料調査を完全に終えて、演奏の統計的分析と論文執筆、学会発表を行なったが、小規模な発表を除くと、これらのほとんどは録音テクノロジーに関するいくつかの側面に関する論文（「インディヘニスモとモダニズムの狭間で革命後のメキシコとC.チャベス」『桐朋学園大学研究紀要第40集』、2016年）さらには20世紀初頭の音楽状況に関する論文（「アメリカ音楽と第一次世界大戦 クラシック音楽界における転換期って」『桐朋学園大学研究紀要第41集』、2015年）など、当該テーマの周辺部を扱ったものであった。小規模な研究会における散発的な発表を別にすると、当該テーマを当初の目的に沿った形で中心から扱ったものはまだ少ない点は大きな反省点である。

#### 4. 研究成果

3年間の研究期間を通じて、最初期のレコード録音が様々な意味で「明確」な演奏様式の確立に貢献していたこと、他の演奏とは「全く異なる」様式の確立を加速したこと、さらには録音機器の発達によって演奏様式の微細な差異が可聴化され「演奏聴

取の専門家」の登場を促したことなどが明らかになった。科研費による研究期間は既に終了しているが、中心的な成果の公表は、今後の重要な課題として残っている次第である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1)「アメリカ音楽と第一次世界大戦 クラシック音楽界における転換期って」『桐朋学園大学研究紀要第41集、2015年

(2)「インディヘニスモとモダニズムの狭間で 革命後のメキシコと C.チャベス」『桐朋学園大学研究紀要第40集』、2016年

〔学会発表〕(計1件)

・日本音楽学会東日本支部第27回定例研究会「第1次世界大戦と音楽」(シンポジウム、パネリスト：沼野雄司、友利修、中村仁、中村真) 2014年12月13日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

沼野雄司 (NUMANO, Yuji)  
桐朋学園大学・音楽学部・教授  
研究者番号：00322470

(2)研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ( )

研究者番号：

(4)研究協力者

なし ( )

以上